Romance Writer's Love Story

Contents

香澄のストーリー 5

桜子のストーリー 71

綾芽のストーリー 151

小百合のストーリー 233

香澄のストーリー

プロローグ

カタカタと小気味良く部屋に響くキーボードの調べ。
その音が作り出すのは、想像の中だけに存在する夢の世界。
そこに住むヒーローたちは、大企業の冷徹なオーナーだったり、傲慢で大金持ちの牧場主だったり、あるいは世の中に背を向ける孤独なドクターだったりする。
ヒロインは飛び抜けた美人ではなくても、誇り高く、人に媚びないまっすぐな性格の女性が好み。
リッチでゴージャス、その上ホット。そんな彼らを自由に動かして、理想の恋物語を描いているとこの上なく幸せな気分になれる。
そしてこの空想の世界の話をインターネットにのせて、現実の世界では会うこともない人々と共有する。
その顔も知らない読者さんに褒めてもらうと、くすぐったい気持ちになるし、何だか自信がわいてくる。
そんな時は、しばし冴えない現実の自分を忘れ、物語を紡ぐロマンチストになりきれるのがうれしい。

彼女が小説を、それもとびきり熱いロマンスを書いていることは誰も知らない。
それは平凡な生活を送る普通のＯＬである香澄の密やかな趣味であり、楽しみでもあったのだ。

1

「ふう……」
キーボードから手を離し、側にあったマグカップからコーヒーを一口すする。
今夜書き足したところをもう一度読み直した香澄は、モニターを見つめたまま羨望のこもった溜息をついた。
自分で書いておいてなんだが、一体どこの恋人たちがこんな情熱的な夜を過ごしているのだろう？
完璧なエスコート、贅沢で夢のようなデート、そして最後にはお約束の、刺激に溢れる官能的な熱い夜。
「はぁ……熱い夜かぁ。何かちょっと、ううん、すごく羨ましいかも」
情景は頭の中にはっきりと描ける。
広い寝室。二人が使うベッドには光沢のあるサテンのカバー。うーん、でなければアンティークのキルトでもいいか。

もちろん山と積まれたふかふかのクッションは必需品。ベッドサイドには重厚なナイトテーブルがあり、その上に置かれたスタンドからは柔らかな明かりが放たれている。
おっと、忘れてはいけないのがベッドの大きさで、もちろんダブルベッド以上。
実物を見たことはないけれど、キングサイズくらいあると転げまわっても大丈夫かな。
うん、シチュエーションはほぼ完璧。
あとは主役の二人が繰り広げる、ホットな時間。
着ている物を剥ぎ取り合いながら、もつれるようにベッドに沈み込むヒーローとヒロイン。
互いの身体をまさぐりあい、じらされた彼女の口からは、快感のあまりすすり泣きが漏れる。
じわじわと責めるもよし、一気に最後までいっちゃうのもありで、精根尽き果てると裸のまま、重なるようにして眠りにつく。
一晩中、目覚めては貪るように何度も求めあう二人。
朝からだって、もう一ラウンドいっちゃったりする。
こと、これについて、脳内の彼らは極めてタフだ。
「あーあ、小説だったらこんなに簡単に熱い夜を演出できちゃうのになぁ」
香澄は一人ごちた。
書いているラブシーンと彼女の現実はかなり違っている。というよりは、かけ離れているといった方が正解かもしれない。
よく読者から「こんな体験してみたい」とか「どうやったらこんなにうまく男性を翻弄し、燃え

上がらせることができるのでしょう?」などという感想をいただくのだが、そのたびにどう返答したものかと頭を抱えてしまう。
悲しいかな、実は自分にはそういう経験がまったくない。できることならこっちが聞きたいくらいだ。
念のため言っておくが、一応男性経験はある。とはいっても今の彼が唯一無二ではあるのだが。
彼がそっちの方が下手だとか、決してそういうことはない。
男の人は彼しか知らないので他と比べようもないけれど、彼とその……そういうことをして、イケなかったことは、初めての時を除いて一度もない。
彼のテクニックは百発百中、不発弾ゼロで、かなりの床上手と考えるのが正解だろう。
問題は自分なのだ。
確かに最初は未経験のことが多く、何から何まで彼に頼りっぱなしだったことは仕方がないと思う。
だがふと気がつけば、もう一年近くつきあっているにもかかわらず、彼との関係はその頃とまったく変わっていないのだ。
ベッドではすべて彼任せ。
自ら何かを求めたこともなければ、彼に誘いをかけたこともない。
もちろん自分から進んでご奉仕……なんてことも、してあげたことがなかったりする。
その結果が、毎回判で押したようなセックス。

週末限定、一晩一回。それも正常位オンリー。
何か物足りないとは思っていても、それを正直に伝えると呆れられそうで、恐くて言えなかった。彼が今のままで満足しているのかを、面と向かって訊くことさえ気恥ずかしくてためらわれた。
一晩でいいから滅茶苦茶になるくらい、奔放なセックスをしてみたいと思う。
淫らな言葉を叫びながら、狂ったように何度も身体を打ち付けあう行為ってどんな感じなんだろう？
小説でよく使うフレーズの「野蛮で原始的な欲求に突き動かされて」とか「本能のおもむくまま」とかいうものを、一度でいいから体感してみたいけれど、そんなことは恥ずかしくてとても自分からは言い出せない。
「何か欲求不満だよなぁ、私」
気がつけば、時計の針が十二時をまわっていた。
そろそろ眠らないと朝が辛い。所詮自分は毎日会社に行かなくてはならない、しがないただのＯＬなのだから。
パソコンの電源を切り、真っ黒なモニターを眺めながら、冷めたコーヒーを一気に飲み干す。
明日は週末、金曜日。
今週、彼は出張中で土曜日まで帰らないと聞いている。
とりたてて予定もないから、明日は早めに帰ってきて続きを書こう。何だかんだ言っても欲求不満なくらいの方がホットなシーンはさくさくと書けるんだから……

香澄はそんなことを思いながら、自嘲気味に笑った。
翌日、同じ課の女の子たちと社員食堂でお昼ご飯を食べていると、ポケットに入れていた携帯が震えた。
メールの着信だ。
「彼氏？」
読んでいる香澄の表情を見て、隣に座っていた同僚がのぞきこむ。
「うん……今日遅くにこっちに帰れそうだって」
「真崎さんも大変だよね、先週もどこか地方に出張じゃなかった？」
「まあ、デキる男だから仕方ないけど、待つ身は辛いよねぇ。今夜はしっかり甘えちゃえ！」
向かいに座る同僚はそう言うと、意味ありげににんまりと笑った。
ああ、こういう時に社内恋愛って困る。
付き合いを申し込まれた時も、周囲には内緒でこっそり告白してくれればいいのに、彼はまったくの無頓着。公私のケジメはしっかりつける人だから、仕事中に彼がどうこうすることはないけれど、何かにつけて外野からあれこれ言われる香澄は密かに身の置き場がなかったりする。
「でも帰ってくるのは深夜、最終になるらしいから」
なんで、こんなわざとらしい言い訳してるのよ？　私。
「いいじゃん、夜は長いのよ」

それでも同僚たちのからかいは止まらない。
「あー真っ赤になっちゃって。カワイイったらありゃしない！」
「彼氏、メロメロになるのも頷けるわよねぇ」
豪快に笑う二人の声に、周りの人たちの注目まで集まり始めてしまった。
お願いですから、もうカンベンしてください。
毎度同じ課の女の子たちにからかわれるのは仕方ないけど、ここで観客を増やしちゃうなんて恥ずかしすぎる。
そんな彼女のささやかな願いが通じたのか、天井のスピーカーから音楽が流れてきた。
「おっと時間だ」
同僚をはじめとして、周りの人々が一斉に立ち上がり、トレーの返却口に殺到する。
それで何とかやっと、この話も打ち切りになった。
助かった……
午後の仕事開始がこんなにありがたく思える日が来るなんて、思っても見なかったよ。
彼女は入社以来、初めて予鈴の音楽に感謝した。

2

定時で仕事を終えた香澄は、帰り道に駅の側にあるスーパーに寄った。
「さて、今夜は何を作ろうかな」
慎介（しんすけ）と会うのは二週間ぶり。先週はお互いに忙しくて、そんな時間もなかった。
同じ会社にいるといえども、フロアが違えば社内で会えるチャンスはないに等しい。
自分は二階の総務・経理部、彼がいるのは五階のシステム管理部だ。
彼の部署は社内外の情報収集、分析、管理を一手に引き受けているため、五階に行くには専用のＩＤカードが必要で、自分のような一般社員は室内にも入れない。
データの抽出依頼やシステムの一部変更をお願いするだけでも、すべて「所属長決裁済み」の申請書類がないと受理されないという、とびきり管理の厳しいところだ。
彼が今担当しているのは、西日本エリア。
守秘義務があるからどういう種類の仕事をしているのかは知らないけれど、とにかく忙しく飛び回っている。
先週は福岡、今週は多分大阪あたり。
総務にいると出張旅費の申請が上がってくるので、どこに行っているかくらいは辛うじてわかる。

彼の方はもうこの状況に慣れっこで、今更「今週はどこどこに行く」なんて言い置いては行かず、香澄は書類で恋人の所在を確認する有様だ。
これは正直ちょっと寂しい。
「なんだかねぇ……」
こんな感じで付き合って、かれこれ一年。
熱も冷める頃合いか？
いやいやよく考えてみれば、最初から二人の間に熱いものなんてなかった。
付き合い始めたきっかけだって、実に淡々としたものだったのだ。
彼、真崎慎介は中途採用でこの会社に入ってきた。
その際に社内を駆け巡った噂によると、ＳＥとしての能力を買われて、どこかの企業からヘッドハンティングされてきたらしい。（あとで本人にそのことを聞いたら「いや。ちょうど転職を考えていた時に、大学のＯＢ会の酒席で先輩――現在のシステム管理部の課長――に誘われただけ」とのことだが。はたしてこれをヘッドハンティングと呼ぶのだろうか？）
入社してきた当時から、彼は目立つ存在だった。
長身で、スーツをセンス良く着こなす細身のスタイル。飛びぬけてハンサムというわけではなく、全体的にシャープな顔つきは冷たそうな印象を与えるのに、なぜか女性社員たちには受けた。
そして見た目が良いだけでなく、独身で仕事もできる切れ者であることが知れ渡ると、将来有望というプレミアがつき、一層周囲の女性たちの注目を集めることになったのだ。

そこで俄然張り切った自分に自信のある女の子たちは、我先にとアタックを開始したが、不思議なことにいつまで経っても成功者は現れなかった。
美人でスタイル抜群、社内でも一番の人気を誇るマドンナでさえ「別に気になる人がいるから」の一言で、あっさりと断られたという噂だった。もちろん彼の「気になる」女性が誰なのか、あちこちで憶測が飛び交ったのはいうまでもない。
当時、香澄は庶務をやっていた関係で、入社に必要となる雑多な申請書類を毎日のように彼に渡していた。それで慎介とも何となく親しくなったが、はっきり言って当初は同僚以上の感情は持っていなかった。
というよりも、こういう男性は観賞用で、少し離れて見ているくらいがいいと思っていた、という方が正解かもしれない。
それに彼女には心に秘めた「ロマンス小説のヒーロー」という確固たる理想があり、その基準からすると彼は現実である分、ちょっとばかりそれから外れているような気がしていたのだ。
だからある日突然、慎介から交際を申し込まれた時には、驚きのあまり、しばらくその場で固まっていたくらいだ。
周囲の女性たちの呆然とした顔も、自分の手から滑り落ち、床にちらばったファイルも何一つ目に入らず、ただあんぐりと口を開けたまま彼を見つめる香澄に、慎介はちょっと困ったような顔でこう言った。
「君は僕には過ぎた人だとは思うけれど、真剣に付き合いたいと思っているんだ」

数いる魅力的な女性たちを差し置いて、何で私なのかと正直言って困惑した。
見た目も性格も地味な自分のどこが彼の目にとまったのか、これがいまだにわからなかったりする。
あの時はさすがに周囲が騒然となった。それも社内の女性陣が。
彼の唐突な行動に引きずられて思わず頷いてしまったせいで、しばらくは会社のロッカールームで待ち伏せされて、彼のファンのお姉さま方にネチネチ小言を言われたり、他の課の女性社員が仕事中に用もないのにわざわざ香澄の顔を見に来たりした。
だが不満をぶつける相手である香澄が想像以上に地味だったせいか、そのうちそういうこともされなくなった。
きっといたぶって楽しもうにも反応までもが地味すぎて、苛め甲斐がなかったのだろう。
ほっと胸をなでおろした反面、そういう対象にすらならない自分が、ちょっと切なかったりするのだけれど。
そんな経緯で付き合い始めてもう一年になる。
ということは、必然的に彼とベッドを共にするようになってからも一年が経つということだ。
出だしはわけもわからずという感じだったが、そこからの展開は早かった。
付き合い始めて一週間後、既に彼女は慎介のベッドの中にいた。
その時も彼から熱烈に誘いをかけられた覚えはない。何となくいい雰囲気になって、気がついたらそうなっていたという感じだ。

初体験の相手が彼だったことは、今でも最高の幸運だったと思っている。
全く経験のなかった彼女を、慎介はこの上なく優しく抱いてくれた。
それでもやはり辛いものは辛く、事後すぐに寝入ってしまった彼の横で、彼女はいつまでも眠れなかった。
もぞもぞと身体を動かすたびに、お腹に鈍痛が走るし、いつまでも何かが足の間に挟まっているような違和感が消えなかったからだ。
そして翌朝、彼に再び抱きしめられた時、残る痛みと恐怖に、思わず涙声で「お願いだからやめて」と哀願してしまったのだ。
慎介は「嫌がることはしないから安心して」とあっさりと手を引き、それ以上は何もしなかったが、本当のところはどうだったのだろう。
もしかしたら、香澄の反応があまりにも子供っぽすぎて、強引にしようとするほどそそられなかったのではないか。そして、彼女の拒絶の一言が決定的に彼のやる気を殺いでしまったのでは……
そう思うと涙が止まらなくなった。彼はおろおろしながら慰めてくれたが、その姿にさえ罪悪感を感じてしまった。
それからしばらくは、後悔と自己嫌悪の繰り返しだった。
考えれば考えるほど、あまりにも幼稚な反応しかできなかった不甲斐ない自分が嫌になった。
それからも彼の態度は前と変わりなかったが、しばらくは慎介の顔をまともに見ることさえできなくて、デートの誘いも何だかんだと理由をつけて断ったほどだ。

急に香澄が付き合いに尻込みをするようになった理由を、セックスが辛いせいだと勘違いしたらしい彼は、「当分無理はさせないから心配しなくていい」となだめてくれたが、彼女が慎介を避けた本当の理由はそんなことではなかった。

大人の女性として、経験はなくてもその場になればもっと大胆に振る舞えると思っていたのに、実際そうなってみると、自分は泣いて嫌がる青臭い子供みたいな反応しかできなかった。その事実が彼女の女性としての自信を打ち砕いてしまったのだ。

それでもしばらくして彼と再びデートをするようになると、成り行きでまたベッドも共にするようになった。

しかしあれ以来、彼からのアプローチは控えめで、暗黙の了解のように、セックスは一晩に一回、と決まってしまった。

それも週末の夜限定だ。

身体が馴染んできた今、時には「もっと」とせがみたくなるが、最初の時の出来事がトラウマになっている彼女には、それを求めることができなかった。

『早く私の中に来て。あなたが欲しくてたまらないの』、か。

「こんなセリフ、ロマンスの中ではいくらでも言えるのにね……」

キーボードを叩きながら、香澄は溜息をついた。

夕食の準備が終わり、先に風呂を済ませると、彼女は慎介の帰りを待つ間に昨夜の続きを書き始めていた。

今書いているロマンスのヒロインはとびきりセクシーだ。

自ら積極的にヒーローを誘い、ベッドでは奔放に乱れる。

「私に彼女の指一本分でも大胆さがあればなぁ……」

ヒロインのように慎介を誘う自分を想像してみる。

ありえない、か。

苦笑いを浮かべた香澄は、しばし現実を忘れ、架空の世界に浸りながら夢の続きを綴ったのだった。

3

日付が変わる頃、慎介はようやく香澄のアパートへと戻ってきた。

約一週間分の衣類を詰め込んだ小型のカート型トランクとアタッシュケースはずっしりと重く、彼女の部屋がある三階までの階段が疲れた身体に殊更応えた。

彼のマンションならば最寄り駅から徒歩五分とかからないし、住居のある七階までエレベーターもある。本来ならこんな苦労はしなくてすむのに、それでも香澄に会うためにはここに帰ってこなければならない。それはひとえに彼女が慎介のマンションに出入りすることを嫌がるからだ。

今、彼が居住しているマンションは、会社の借り上げ社宅である。転職の際、総務の斡旋があったから深く考えずにそこに決めたのだが、社内の人間も数人、同じマンションに住んでいた。

もともと二人の付き合いが噂になるのを嫌がっていた香澄は、慎介と一緒にいるところを会社の人間に見られることを理由にして、なかなか彼の部屋に来たがらない。
だが慎介はその言い訳を不審に思っていた。
本当は、彼の部屋に良くない記憶があるから行きたくないと言っているのではないか、と疑っているのだ。
その記憶とは、彼女と初めてベッドを共にした時のことだ。
自分なりに抑制したつもりだったが、翌朝、香澄に涙目で「やめて」と哀願された時には、さすがにショックだった。
彼女には男性経験がなく、すべてが初めてだったので、多少の抵抗は覚悟の上だったものの、まさか嫌がって泣かれるとは思ってもいなかったからだ。
その後、プライベートでも会社でも延々と彼女に避けられ続け、一時はもう無理かと諦めかけた時期もあったくらいだ。何とか元の関係に戻った時には正直言ってほっとした。
それからは「忍」の一文字、特にベッドで彼女が嫌がりそうなことは絶対に要求しないように徹している。
だが、彼女に無理強いをするのは望ましくないと思いつつも、心のどこかでもっと濃密な時間を求めている自分がいることは否めない。
若さゆえの性欲と、一年かけて馴染ませてきた彼女の身体は自分だけのもの、という独占欲、そして何も知らない無垢な状態だった香澄を手折った以上、彼女の気持ちを守ってやらなければという責任感が彼の中で三竦みの状態になっていて、どうにも身動きが取れないのだ。

「こんなに相性がいいのになぁ」
今まで付き合ってきた女性たちと比べても、香澄との相性は桁外れにいい。
何しろ互いに好みを押し付けあう必要がないのだ。多少の譲り合いや妥協をしても、まったく苦にならない。
それはベッドでも同じで、経験の乏しい彼女は知る由もないことだろうが、こんなに相性のいい身体の組み合わせは滅多にあるものではないと思う。
香澄自身、彼が教えたことには従順だし、反応もすこぶる良い。
あとは彼女が引きずっているであろう初体験時の怯えや羞恥心を取り払えれば、もっと大らかな気持ちで愛を交わすこともできるようになるのだが……
そんなことを考えながら階段を昇り、ようやく彼女の部屋に辿り着いた。
時間を考えて、呼び鈴を鳴らさずに合鍵を使って中に入る。
おや……？
いつもなら香澄が物音を聞きつけて迎えに出てくるのに、今日はその気配がない。
玄関に上がり、明かりが漏れているリビングのドアを開けると、案の定、彼女はローテーブルにうつ伏せになってうたた寝をしていた。
「香澄、起きて。こんなところで寝てたら風邪をひく」
肩を揺すってみるが、彼女は何か、もごもごと寝言を呟くとそのまま再び寝入ってしまった。

一週間の仕事の疲れもたまっているだろうし、もう時間が時間だからな。
仕方なく眠りこけている香澄を抱き上げて隣の寝室へと向かったが、身体に触れた感触で彼女が薄いパジャマの上着の下に何もつけていないことに気付き、慎介は天を仰いだ。
これは拷問か？
ただでさえ週末の夜限定の逢瀬なのに、先に寝られたら手が出せない。
出張に加え、香澄の身体の周期もあって、三週間以上触れていないのに、もう一晩我慢しろとは、何とも無体な話ではないか。
しかもこんな薄着の彼女と、同じベッドで眠らなければならないなんて。
彼女のしどけない寝姿に、否応なしに身体の一部が反応してくる。
自制心がブチ切れる前に香澄をベッドに下ろすと、彼はそそくさと寝室を離れた。
「無自覚だから、余計に性質が悪い」
軽くシャワーを浴び、リビングへと戻ってきた慎介は溜息をついた。
彼女の無頓着さは、時としてあからさまな誘いよりも強烈に彼を刺激する。その衝動を押し殺して、平然とした顔で香澄と対峙するのはかなり自虐的な行為だ。
最近はいつまでこの状態が保てるか、自分でも自信が持てなくなってきている。
半ば諦めの気持ちで、とりあえず冷蔵庫からビールを取り出してくると、一息で半分ほどを飲み干した。
「今夜も生殺しか」

ぶつぶつ零しながら飲みかけの缶を置こうとローテーブルの上に広がる物を隅に寄せた時、点けっ放しになっているノートパソコンに目が止まった。
「ん？　スリープモードになっていたのか」
帰ってきた時にはモニターは真っ黒だったが、テーブルを片付けているうちにどうやらマウスか何かに触れたらしい。画面には作業途中の文書ファイルが表示されていた。
「ちゃんと保存終了しておかないと、あとで泣くぞとあれほど言っているのに……」
ぶつぶつ言いながら、ファイルを閉じようとした慎介の目に飛び込んできたのは、書きかけの文章の断片だった。
他人のものを無断で読んではいけないとわかってはいるが、そこからどうしても目が離せない。
何せ、『一晩』で、
「半ダースの、コンドームだとぉ？」
彼は自分の目を疑った。
その内容を追っていくと、およそ日頃の香澄の言動とはかけ離れたものだったからだ。
要約すると、『彼』は『彼女』の部屋に行くと歯止めが利かなくなり、突如『発情した牡牛』のように理性が吹き飛んだらしい。
で、まず玄関で彼女に襲いかかるようにして一戦、シャワーを浴びながら浴室でもう一戦。
あとは、なし崩しにベッドになだれ込み、朝までやり続けた結果……
「気がつけば一ダース入りの箱が半分空になっていた……か」

すごい想像力だが、一晩に半ダースとは。
六回だぞ、六回。
いくら頑張っても、普通、体力的にそれは無理だろう。
それも、上下、前後、立ち座り、あらゆる体勢でもつれあう登場人物たち。
「何かすごいぞ、コレ」
驚きの反動で笑いが込み上げてくる。
実際やったことがないのだから仕方がないが、これはちょっと凄すぎる。
大体、彼女は「発情した牡牛」なんて知っているのだろうか。ちなみに自分はそんなものを見たこともない。
しかし、香澄がこんなことを考えていたなどとは、思ってもみなかった。
いつも受身で、促すとようやく遠慮がちに自分に触れてくる彼女が、いきなり『馬乗りになって、あそこを掴む』とは。何ともワイルドでそそられるが、実際の場面で本人が平然とそれをできるのかは甚だ疑問だ。
「これは一度、きちんと実技指導を含めたレクチャーをしないといけないな」
自分の思いつきに満足げな笑みを浮かべると、慎介はいつもの癖で几帳面に上書き保存をし、ファイルを閉じる。
そしてパソコンの電源を落とすと、寝室に続くドアへと向かった。
さて、何から教えようかな。

そこでは、まだ何も知らない香澄が、嵐の前の静けさの中で穏やかな寝息をたてていた。

4

さわさわと肌を掠める感触がくすぐったい。
「ん、あとちょっとだけ寝させて」
まだ半分寝ぼけた頭で悪戯な手を払おうとした香澄は、違和感に気付いた。
手が動かない。
「目が覚めた？」
驚いて急に覚醒した彼女の目の前にあったのは、慎介の顔だった。
「もう、びっくりするじゃない。いつの間に帰ってきたの？　それよりも私の手が……」
いや、おかしいのは手だけではなかった。
正面から彼と触れあっている部分全てが、湿り気を帯びている。
何で？　私、裸だ……
「やだっ、私のパジャマ」
にやりと笑った慎介の顔がどこか悪魔っぽい。クールな顔立ちだから、笑うと余計に凄みがある。
「あれ、お気に入りのシルクのパジャマなのに、どこにやったの？」

「いらないから脱がせておいた。心配しなくてもちゃんと畳んでおいてあるから。ついでに下着もね」
「嘘!?」
密着している身体を離し、視線を落とすと、そこにはあるべきものがなかった。
「やだっ、私のパンツ、返してよ！」
「パンツだなんてそんな色気のない。せめてパンティと言ってほしいなぁ」
「ズロース」って言わないだけマシよ、と的外れなことを心の中で叫びつつ、自由にならない手を何とかしようともがく。彼女からは見えないが、慎介のネクタイで後ろ手に軽く縛られているのだ。
「無駄なことはしない方がいいよ。それに、もぞもぞ動くたびに胸を突き出して、誘ってるの？」
いつもの彼ならこんなことは絶対にしないし、言わない。
どうなってるの？
慎介は、戸惑う香澄に抗う隙も与えず、彼女の片足を持ち上げると自分の腰に巻きつける。
隠すものがない足の間に彼の熱い昂りが滑りこんでくると、香澄はたまらず息を呑んだ。
もうこんなになってるなんて。
慣れ親しんだ習慣で、慎介との睦み合いは互いの身体を徐々に高めてから始まるのに、今日はいつもと様子が違う。彼女はまだスタート位置にもついていないのに、慎介はもうGOサインを待つばかりの状態になっていた。
「いやだ、こんな格好」
恥じらい、何とか足を閉じようとする香澄のお尻を抱えると、彼は自分の猛りを彼女の足の間に

擦り付けた。その間にも慎介の手は、香澄の身体を余すところなく這い続けている。
首筋から伝い下りた唇に胸の先を吸われ、ざらつく舌を巻きつけられながら甘噛みされると、香澄は無意識に身体を押し付けるようにして仰け反った。
「はぁ、あんっ……ち、ちょっと待ってよ」
彼女の言葉を無視して、彼が足の間のひだを分かち、長い指をするりと滑りこませる。少し曲げた指先で感じる場所を軽く引っ掻かれると、見る間に彼女の身体が熱を帯び、赤く色づいていった。
「し、慎介ってば、どうしたのよ」
困惑し、起き上がろうとして、再び押し倒された香澄は、敏感になった突起を指先で強く捏ね回されて身悶えした。
「ああ、あっ……」
痺れるような快感に全身を貫かれた香澄は、押し広げられていた足を震わせ、小さく悲鳴をあげながら彼に腰を擦りつける。
身体の奥から滲み出す潤いが彼の手を濡らし、太腿を伝うのを恥ずかしく思いながらも、巧みなリードに翻弄された香澄は、いつの間にか自ら腰を揺らし始めていた。
「ほらもうこんなに濡れてきた。香澄のここは本当に敏感で可愛いね」
こんなセリフ、今まで言われたことがなかった。戸惑いと羞恥、それに自由にならない手のもどかしさに過敏になった身体は、どこを触れられてもそれだけで肌が粟立つ。
「さあ、行くよ、覚悟はいい？」

彼は耳元でそう囁くと、彼女の中に一気に自分を突き入れてきた。
「うっ……くぅ」
鈍い衝撃が下腹部を襲う。
それはいつものように少しずつ慣らしながら抱き合う時よりも、数段奥深くまで入り込んできたように感じられた。
しかし、ショックはそれだけでは収まらず、慎介は巻きつけた方の彼女の太腿を抱えると、より大きく足を開かせたのだ。
「ほら、見てごらん」
ぼんやりと言われるままに目をやると、そこには彼に貫かれる形で繋がっている二人の身体があった。
目の当たりにしたそれは、驚くほど淫らな光景だ。
『出入りする彼のものが、ぬらぬらとした光沢を放ちながら……』
朦朧とした頭の中を、そんな小説のフレーズが駆け巡る。現実とは思えないが、これは明らかに彼女自身の身に起きていることなのだ。
「どう？　男を咥え込んだ自分から目が離せない？」
なぶるような慎介の言葉に、恥ずかしさのあまり、自分の内部がぎゅっと締まるのを感じる。
「そんなに締め付けないで。すぐにでもいきそうなんだから」
堪えるように眉根を寄せながら、彼は広げた香澄の足を折り曲げて、彼女の最奥を突き上げてきた。

「あ、いやっ、やめて……」
香澄の口から悲鳴が漏れる。いつもは彼女がそう言えば、すぐにソフトな抽送に変わるのに、今日に限ってはますます早く激しくなっていく。
もう、だめかも……
普段よりも早く来そうな限界に抗いながら堪えていると、急に彼の動きが緩やかに変わった。
た、助かった？
急激に昇りつめていた香澄は、この機に乗じて何とか上がった息を整える。
今夜の慎介は、いつもと様子が違う。荒々しく彼女を責め立てることを、何だか楽しんでいるように思えてならなかった。
と、一息ついた慎介が急に腰を引き、彼の猛りが引き抜かれた。
「あっ、ふぅっ」
敏感になった内壁が、その刺激に反応して、思わず鼻にかかったような甘い声が漏れる。
それを聞いてにやりと笑った彼に身体を転がされ、うつ伏せにされた香澄は、慎介が今度は後ろから覆い被さるようにして、自分の中に入りこんできたのを感じた。
「ひっ、ああっ」
背中に彼の重みを受けながら、今までと違う場所を刺激されると、足が引きつったように震え、背中がしなった。
前に回された手で腰を引き寄せられると上半身だけがシーツに落ちてしまう。枕に顔を埋め、彼

に向かってお尻を突き出すというとんでもない格好をしていることはわかっているのだが、抗おうにも身体に力が入らない。
「香澄、ああ、すごい。中が絡み付いてくるみたいだ」
「し、んすけ？　……あんっ」
激しく突き上げられ、朦朧とした意識の中で香澄は思った。
後ろからなんて今までしたこともないのに、やっぱり今日の彼はどこか変だ。
真夜中のシンとした部屋に、二人の荒い息遣いと身体を打ち付ける音だけが響く。
「もう、だめ……」
「ああ、僕ももう……くっ」
先に達した香澄が身体を痙攣させて脱力すると、背後の慎介もそれを追いかけるように唸りを上げながら、彼女の中で果てた。

「……一体、今日は、どうしたの？」
まだエクスタシーの余韻で小さく震えている香澄が、切れ切れに問う。
やっと拘束を解かれて自由になった手は、無意識に彼の頭を抱き、短い髪を梳いていた。
今夜の慎介は、全てがいつもと違った。激しい動き、それに弄るような言葉や態度も。
「ちょっとしたスパイス」
彼は平然とそう答えると、身体を入れ替えて仰向けになった自分の上に香澄を抱き上げる。

「えっ？」
いつもなら一度終わればそのまま寝入ってしまうはずなのに、彼はまた動き始めていた。
「ちょ、ちょっと、慎介!?」
バランスを取ろうと慌てて手をつく彼女の腰を支えると、彼は強引に香澄の身体を逆向きに変えさせた。
「もっとしっかり硬くしてよ。香澄の手で」
目の前にあるものに戸惑いながら、彼女は動けずに固まっていた。
そりゃぁ、何度かしたことはあるけれど、いつも彼自身をまともに見ないようにしていた。こんなアングルで真正面からまじまじと、立ち上がった彼の分身を見たのは初めてだった。
「ほら、香澄ももっとこっちへおいで」
足首を掴まれてあっという間に彼の頭の方へ引き寄せられる。
ちょうど互いのものが目の前にくる状態。
こ、これって噂に聞くシックス○○○ってこと？（脳内で自己規制）
どうしようかと悩んでいるうちに、慎介が彼女の足の間を弄り始めた。
指で奥を探られ、舌で敏感な核を転がされる。無意識に腰が揺れ、彼が触れやすいように足を開いてお尻を突き出している自分に気付いた彼女は、羞恥のあまり肌を赤く染めた。
「いやだって。恥ずかしいじゃない」
だが、逃げようと身体を捩る香澄のお尻を撫でながら、彼は平然と言い放ったのだ。

「僕だって見られているんだからお互い様だろう？　さあ、早く僕にも触って」
よくわからない理屈だが、それでも促されておずおずと彼に触れる。
こういう時、小説の中のヒロインならどうするだろうか。
『大胆に掴む』？　『手で扱く』？　それとも『口で』……
香澄は何だか急に、うじうじと考えるのが嫌になってきた。
今日の慎介は「異常」だ。それなら今夜一晩くらい、自分も羽目を外してもいいではないか。
そう、まるで今書いている小説の、奔放なヒロインのように。
「うわっ」
まさか香澄が、大胆にも口を使ってくるとは予想だにしていなかったのだろう。いきなりの攻撃に慎介が悲鳴をあげた。
「おい、こらっ」
肩越しにちらりと彼を見た香澄は、にっこりと笑うとそのまま分身の先端から窪みまで舌を滑らせた。
以前彼が自分で教えてくれた、一番弱いポイントだ。
慎介の身体が一気に強張り、汗が噴き出す。
今まで浮かんでいた余裕の笑みはあっという間に消え、ぎらつく目で自分をいたぶる彼女を見つめている。
『全身からギラギラとした欲望を滲ませた彼が……』

立ち読みサンプル
はここまで

そういえば、以前書いた中にこんなフレーズもあった。今まさに、彼はそんな状態になっているように見える。
こんな切羽詰まった表情をした慎介を見たのは初めてだった。
いつもの憎たらしいほどのクールさは跡形もなく消え、舌の動きに合わせて悶えている彼を見ると、おのずと自分も興奮してくる。
何だかよくはわからないが、とにかく今日は二人ともいつもと違う。
お互いに今まで抑えてきたものが一気に爆発したような、そんな感じだった。
こうして思う存分互いを高めあい、座位のままで再び身体を繋げた時、慎介の顔にはいつもはない満足感が表れていた。
「やっぱり君は最高だ。僕はもう香澄しか抱けない」
身体の重みで深く貫かれながら、耳元で囁かれた言葉に、香澄は舞い上がった。
ちょっと控えめだけど、小説のヒロインがベッドでヒーローの賞賛を浴びた時の気持ちってこんな感じかな。
「うれしい。そんなこと初めて言ってくれた……」
少し恥ずかしそうに顔を赤らめながらそう言う彼女は、いつもの香澄だ。
だが、彼の突き上げに合わせて髪を振り乱し、大胆に腰を振る彼女もまた本当の香澄に他ならない。
慎介は思った。
固いさなぎからやっと羽化した蝶さながらに、一年かかってようやく彼女は自分を解き放つ術を